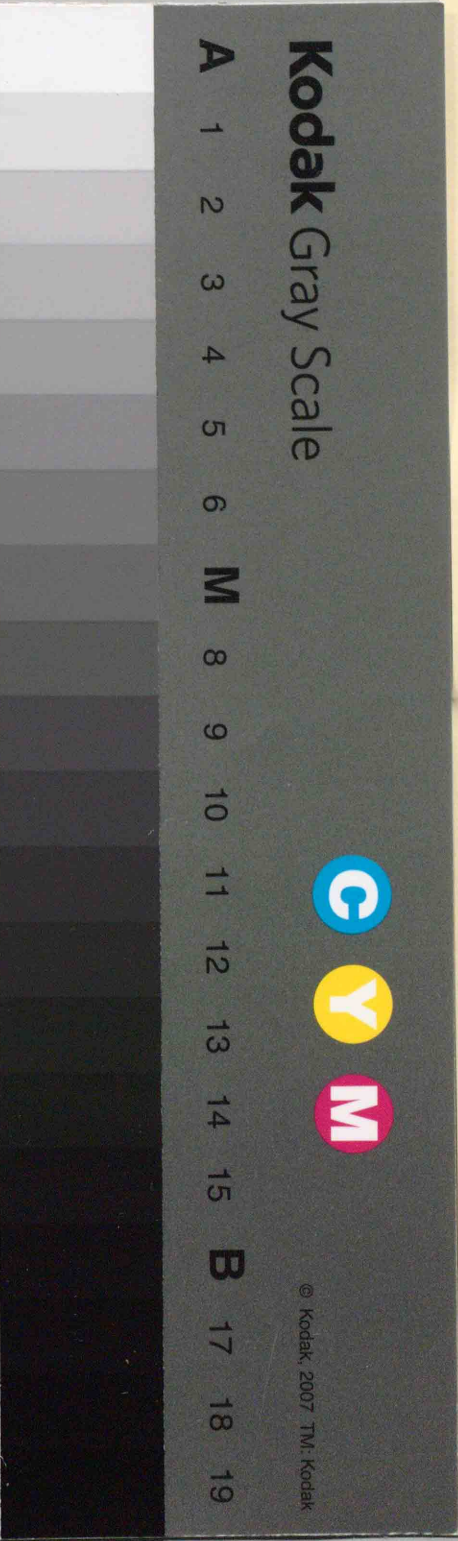
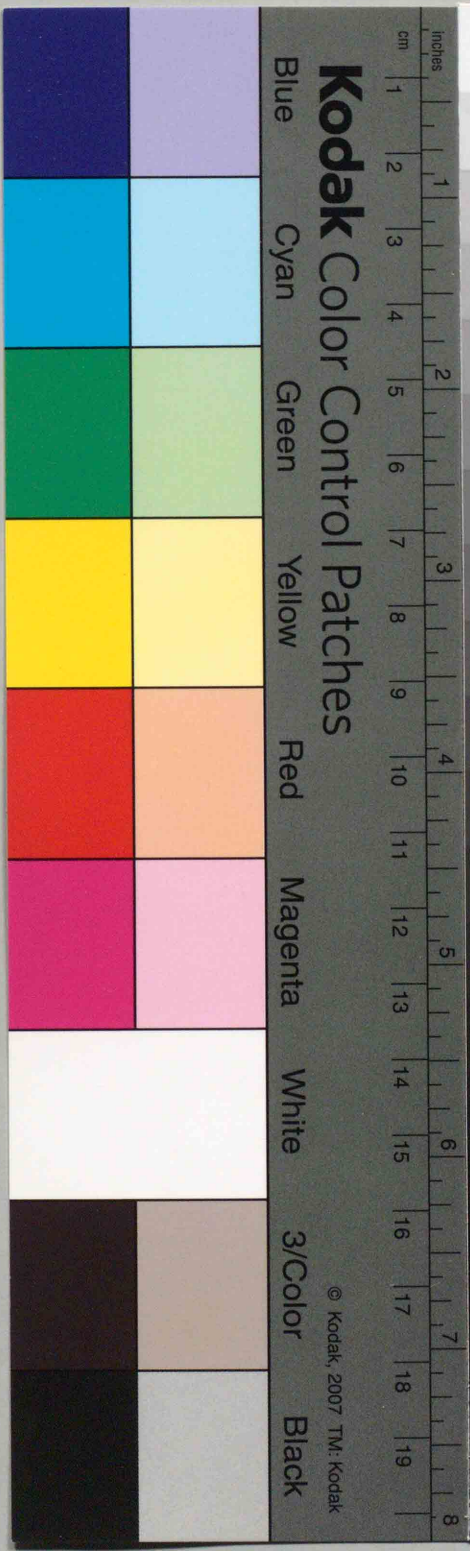
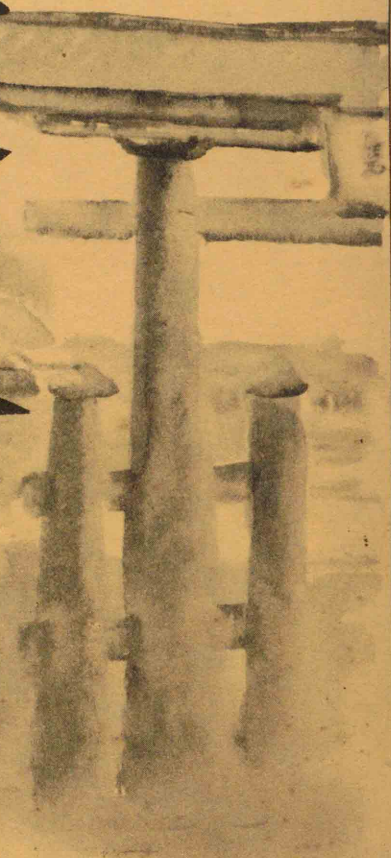


教科書文庫
4
291
30-1935
2000302823

郷土讀本 上卷

廣島縣教育會



43258

教科書文庫

4
291
30-1935
20003 02823



教科書文庫
4
291
30-1935
2000302823



郷土讀本 上卷

廣島縣教育會

広島大学図書
2000302823



資料室
中央図書館

375.9
H118

廣島大學
圖書印

第十四	ゴム工場	三六
第十五	石井末忠	三九
第十六	鞆の浦	四〇
第十七	備後織物	四三
第十八	蜜柑山	四四
第十九	廣島海苔	四七
第二十	黄金の太刀	五〇
第二十一	針	五三
第二十二	すなめりくぢら	五四
第二十三	荒分銅	五七

附録
 廣島縣地圖
 郷土史年表

郷土讀本上卷

第一 我等の郷土

我等の郷土廣島縣は東西百二十八軒、南北百十二軒、中國第一の大縣である。面積は八千四百三十六平方軒、人口は百七十五萬餘もあつて、四市十六郡に分れ、縣廳は廣島市に置いてある。北は長い中國山脈が東西に走つて山陰との境をなし、南は世界の公園といはれてゐる瀬戸内海をはさんで四國とむかひあつてゐる。陸には高原のやうな山地が北から南へ傾いて海岸までつき、内海には百五十餘の島々があつて、海岸には岬や灣がたくさんあるので天然の良港が多い。

溫和な氣候は四季とりくに花を咲かせ、小鳥も歌ひ、おいしい果物もゆたかである。川は水力發電に用ひられ、西の山地は雨が多いので樹木がよくしげり、雨の少い東には牧場があり、南には塩田が多い。

北の三次盆地を流れる江川は、山地を通りぬけて日本海に入り、山陰との交通を便利にしてゐる。西の太田川、東の蘆田川はどちらも南に流れて内海に入り、かなり大きな廣島平野と福山平野とをつくつてゐる。しかし一體に平地が少ないので、谷間や丘の上までよく開かれて色々な産物が多く、到るところ皆生きくとして活氣に満ちてゐる。

それに我が國の主な鐵道である山陽本線が東西に走り、多くの支線もあるので、産業や交通や都會が大いに發達してゐる。

海には大小無数の汽船が通つてゐて、廣島灣を始め南の海岸地方

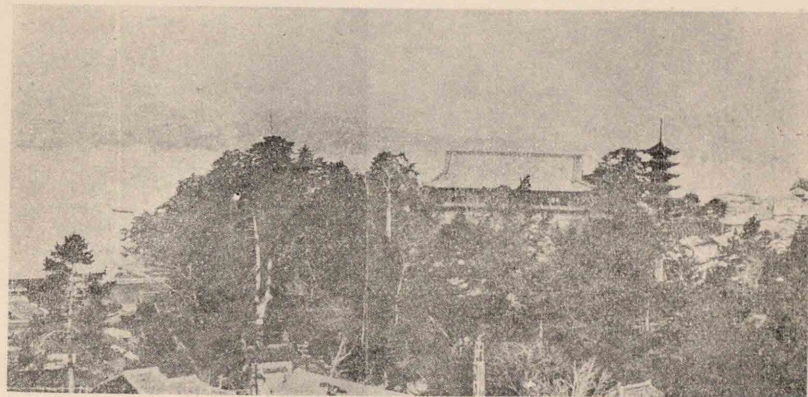
には人口も多く、商工業が盛で、島々には園藝が發達してゐる。どこへ行つても景色がよく産物が多いので、我等の郷土は西日本の樂天地といはれてゐる。

第一 嚴 島

四月十五日、四年生一同は先生にみちびかれて嚴島神社に參拜しました。宮島驛で電車を下り、連絡船に乗つて渡りました。みどりの彌山をうしろに、朱ぬりの大鳥居が見え、社殿や廻廊が海の中に浮んで、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

棧橋からお社までの道の兩側には、しゃくし貝細工、宮島焼などを賣る店や、旅館が軒をならべ、あいそよく客を呼んでゐます。石の大鳥居をくゞり、燈籠の立ちならぶ三笠の濱をつたつて左に折れ

市杵島姫命は素戔嗚尊の御子で酒造航海の神として崇められてゐる。



嚴

ると、廻廊の東口に出ます。こゝで手を清め口をすゝいで、廻廊を右に折れ左に廻りして進みました。拜殿の前で一同せい列してうやくしく拜みました。
先生の説明によると、嚴島はもと伊都岐島といはれてゐました。これはお祀りしてある神様が、市杵島姫命であるからだといふことです。推古天皇の御代にたてられた古いお社で、後平清盛が安藝守になつた時、一そう立派にし、今日のやうな社殿になつたのださうです。

千疊閣は僧惠瓊が豊太閤の命により建立したものである。



島

参拜をすませ、大元公園でひとやすみしてから、坂道づたひに紅葉谷公園に出ました。木蔭に鹿がたくさん遊んでゐました。よくなれてゐて私達を見ると餌をもとめてよつて來ました。このあたりには、幾百本とも知れぬもみぢが、清らかな谷川の水にかげをうつしてゐます。秋の美しさが思ひやられます。
それから高い石段を上つて塔の岡に出ました。今はちやうど満開の櫻に、ままれて五重塔と千疊閣がそびえてゐます。こゝからは見はらしがよ

誓眞は伊豫國務城主村上頼多の子孫で、廣島に居たが後發心して嚴島光明院了單和尚に師事し僧となつたのである。

く、白帆が靜かにすべつて行く瀬戸内海が、すぐ眼の下に眺められます。私達はこゝでおべんたらを食べて、裏道を通つて歸りました。途中、先生は

「この島の土産物、宮島細工の起りは古いこととて、誓眞といふ僧が飯しやくしを作つたのにはじまるといふことだ。宮島細工は木をくつた盆などが主で、みんな大鳥居のもやうをほりこんである。今日ではこの島で最も大切な産物の一になつてゐる。」とお話になりました。

第三 嚴島の戦

今からおよそ四百五十年昔、戦國時代といつて日本中のあちらこ

五日市城・櫻尾城折敷畑は今の佐伯郡に、銀山城・八木城は今の安佐郡に、己斐城は今の廣島市己斐町にあつたものである。

ちらに強い大將が出て、たがひににらみ合つてゐた頃、中國地方で大へん強かつたのは毛利氏である。

中國地方で初め盛にあつた大内義隆は、皇室へも忠義で、その勢はなか／＼すばらしいものであつたが、油斷したために家來の陶晴賢に攻めほろぼされてしまつた。毛利元就は主人の仇討をしなければならぬと考へ、朝廷のおゆるしをいたゞいて支度にとりかかつた。先づ五日市城つゞいて銀山・八木・己斐・櫻尾の城を攻め取り、大野の折敷畑で陶軍の大將を斬殺して大勝した。それからいよく晴賢をうつことになつたが、味方の小勢では勝味がうすいので、神様にはおそれ多いが、大軍では自由のきかぬこの狭い島に陶軍をおびきよせ、一討にしようと思へた。

元就は部下の大將に要害山の宮尾城を守らせた。晴賢は元就が嚴島に立てこもつたと聞き、家來のとめるのもふりきつて三萬の



兵をつれて岩國を船出し、嚴島に渡つて塔の岡に陣をかまへた。弘治元年十月一日の夜、元就は五千の兵を二手に分け、自ら一隊をひきゐ、他の一隊はその子小早川隆景につけた。雨風ををかし、對岸の地御前から、ひそかに鼓ヶ浦に渡つた元就は、船を一隻残らず歸してしまつて、勝つか死ぬかの覺悟を定めた。そしてけはしい山をよぢて博奕尾に進み、塔の岡の後からどつと敵陣に斬りこんだ。一方隆景は大鳥居の附近に集つた陶軍の船の間をすり抜けて上陸し、正面から眞一文字に攻め入つた。陶方は狭い所に動きのとれぬ大軍、その上に前後から不意を討たれてあはてふためき、大元・龍ヶ馬場で防いだ、が次第に浮足立つて西に逃げ散々に破られた。大兵な晴賢はやつと海岸まで出たけれども船がない。岸傳ひに大江の浦に逃げてつひに自殺した。戦は三日の後、元就の大勝利に終つた。

現在でも嚴島において、死骸の火葬は對岸で行つてゐる。

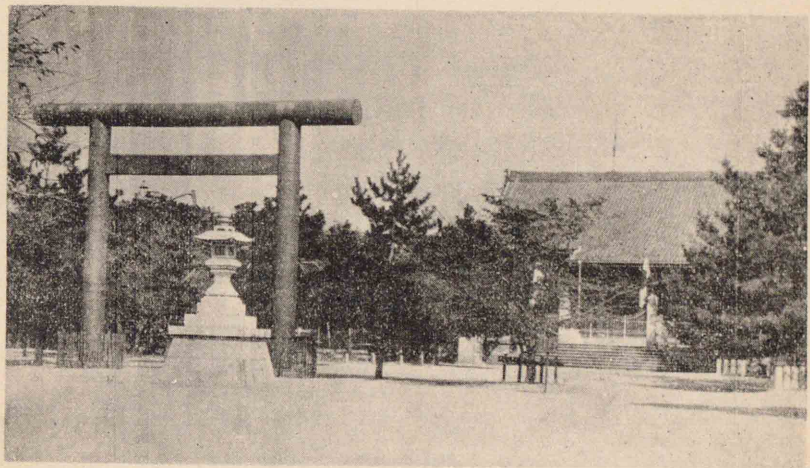
元就は敵味方の死骸を對岸大野に送り、血に汚れた土地をけづりとり、社殿廻廊は海水で洗ひ清め、三子隆元・元春・隆景以下の將士を引連れて參拜し、お神樂を上げて勝利のお禮を申上げた。つゞいて廿日市の洞雲寺で晴賢の首實檢を行つた。この戦から毛利氏はいよゝゝ中國に勢を得るやうになつた。

第四 比 治 山

廣島驛から宇品行のバスに乗ると、間もなく比治山のふもとに着く。廣いだらゝ坂を上ると、左側に昔風の建物が見える。これは有名な頼山陽先生をおまつりしてあるところだ。先生のやうな忠孝な人が、我が縣から出てゐることは、たいそううれしい。

文永・弘安の役約
六百五十年前

注連石は注連柱と
もいふ。



殿 便 御 舊

そこから又上ると、左右には何百年もたつたかと思はれる大きな松が生えてゐて、まるで山奥へても来たやうである。
つり橋の下を通るとすぐ左に、一米位の長い石が碑にしてある。これは昔元といふ國があだした時、敵の使つたいかりで、日本中に四つしかない。
大きな注連石を通りぬけると大廣場に出る。高い大鳥居が先づ目につく。よく人になれた何百羽かの鳩が、鳥居の上にも廣場に

もたのしさに遊んでゐる。鳥居をくぐると正面の小高い所に、明治天皇をお祀りした御便殿がある。これは明治二十七八年戦役に天皇が大本營を廣島におかせられた時、帝國議會を開かれた時の御便殿である。

このあたりは桜が多い。春は全山花にうもれ、御便殿のお屋根がその上に光つて見えるのは、かくべつたふとく思はれる。ここは見はらしがよくて、市中が遠くまで見渡される。いくすぢかの太田川が白く光つて、いかにも水の都らしい。

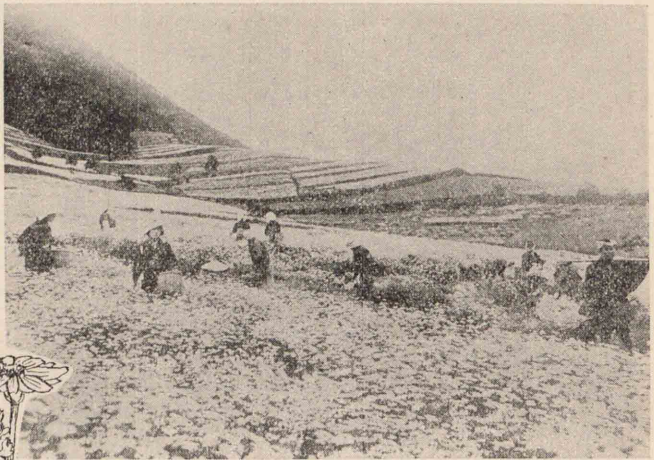
参拜をすませてつり橋までもどり、左の山道を行くと陸軍墓地へ出る。春から夏へかけては道々の谷あひからうぐひすのよい音が聞える。

陸軍墓地は日清・日露等の戦に國のため戦死した方々の眠つて居られる所である。小さいお墓がずうつと列んでゐて、何ともいは

れぬ心持がする。
この近所に大砲がある。今でこそ赤さびだが、長い間お晝の時を知らずためにどうんとなつたものである。

第五 除 蟲 菊

春も終の五月のある日曜日、僕は尾道から竹原行の船に乗つた。天氣のよい波のおだやかな日で海上にはたくさんの釣舟がたゞよつてゐた。その間をぬつて船はすべるやうに走つた。向ふの島々は畑一面に白い布でも敷いたかのやうに眞白に見える。そばの人に聞いて見ると除蟲菊の花だといふことである。僕は學校園に二三本あるのは見たが、こんな一面に植ゑてあるのを見たのは始めてである。船が須波につくと、大勢の人達がのり込ん



除 蟲 菊

だ。どこへ行く人だらうと思ひながら、その話を聞いてみると除蟲菊刈の手傳てまひに行く人らしい。ふろしき包やバスケットを持つてゐるところを見れば、二三日とまりがけのつもりだらう。その晩竹原の親類でをぢさん達と色々話してゐる中、又除蟲菊の話が出た。

この邊では、除蟲菊の花のまだ咲き過ぎない時を見はからつて、短い期間に

除蟲菊の正しい和名はしろばなむしよけきといふ。廣島縣の年産額は約五十八萬圓で北海道に次ぎ全國第二位である。

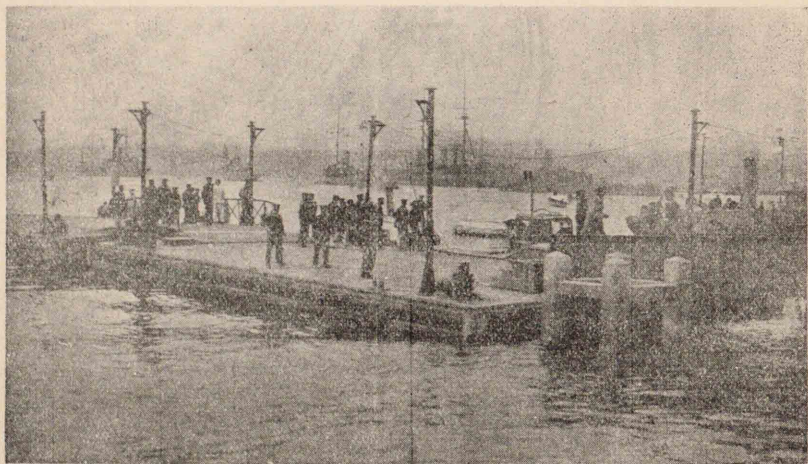
刈り取るために、方々から人手を頼むのである。かうして刈り取つた除蟲菊は花だけをこき落し乾かして賣り出すのだ。除蟲菊には暖い砂地がよいので、この邊にたくさん植ゑられる。だから取込の時は、稻や麥の取入れ時のやうに忙しいので、時にはそのために學校も休暇にされる所があるなどと話された。乾いたこの花や莖が小さく粉にせられて、蚊取線香や蟲よけの薬になることも其の時始めて聞いた。

第六 吳 軍 港

吳は明治二十三年軍港となるまでは、さびしい田舎に過ぎなかつた。其の當時は和庄町・莊山田村・宮原村・二川町等の小さい町や村であつたが、今日では人口二十萬に餘り日本でも名高い大都會に

なつた。

市街の中央附近は最初から計畫せられてゐたため、街路も廣く、眞直であるが、ほとりの部分は自然の發達にまかせたので、坂道で不規則な所が多い。新しく吳市にはいつたものに、吉浦・阿賀・警固屋等の町がある。港は軍港であるから特別の船に限つて川原石だけに入港させる。他の船は吉浦・鍋阿賀の港へ着けなければならぬ。それでこの三港は吳驛と共に市の出入口の役目をしてゐる



(場陸上一第) 港 軍 吳

る。

吳灣は後に山をめぐらし、前面に能美江田島をひかへ、港としては申し分がない。其の上瀬戸内海の中央にあつて、外海に遠いから、敵の攻撃を受ける心配が少ない。そこで東洋第一の海軍工廠が設けられることになつた。

艦隊が入港した時は水兵さんの上陸でにぎはふし、又朝夕は工廠に通ふ職工さんで通は埋まつてしまふ。

吳は海軍と共にさかえて行く港である。

第七 蘭 刈

去年は雨降りが續いてみんな困つたが、今年は毎日よい天氣が續くのでその心配はない。明日もきつとお天氣だといふので、午後

四時頃から蘭草の刈取りがはじまつた。

おほぜい來て手傳はれ十時頃には刈取りだけは終つた。その後おそくまで、蘭泥づけもせられたが僕は寝てしまつたのでそれは翌朝知つた。

僕が目をさました時には、向ふの丘から道路のほとりまで蘭草が一面にほしてあつた。晝頃になるとその上に眞夏の太陽がかん／＼照りつけて、蘭草の香が強く鼻をついてくる。

お晝がすむと、蘭草返しが始まつた。やけつくやうな日中に汗とほこりにまみれて働く人達の苦勞は、なみたいていではない。



刈 蘭

夕方近くになると片附けが始まる。乾いた蘭草は腰につけた縄で小さく束たばねられて行く。これは又大きな束にして立てられる。何十となく立ち並んだ蘭草の束は、片つばしから小屋の中に積み重ねられる。かうして仕事はずん／＼はかどつて行つた。今日は雲一つないかん／＼日和ひよりだつたので、もう一日乾かせば十分だといふことだ。これで疊表につくられるまでこのまゝたくはへられるのである。こんなに夏の最中に刈取りをする蘭草は其の植付は又寒い冬の最中である。別の畑で大きくした苗を、十二月頃田に水を引き込んで植ゑ付ける。春にかけての手入れもなかなか骨の折れるものだ。積み込んだ蘭草は一年中農家のひまひまに疊表につくられる。水を吹いてやはらげた蘭草は、朝早くから晩遅くまで、かたん／＼とひびく表ばたの音の中に、一寸二寸と織られて行く。

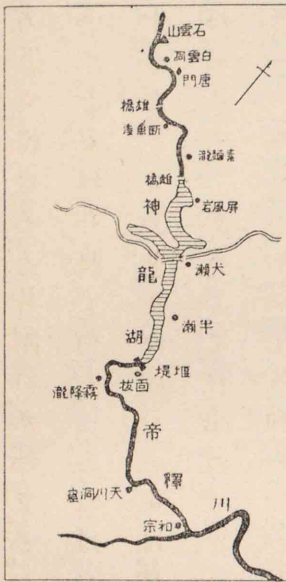
我が縣の蘭草の年産額は約百五十萬圓で、疊表は全國第一位である。

青疊の美しい色と香、それもかうした人達の流した汗のたまものである。

第八 帝釋峽と三段峽

大正十二年に名勝地と定められた帝釋峽は、比婆郡と神石郡とのさかひにあつて帝釋川が石灰岩をとかし、底をけづつて大きな谷

帝釋峽略圖



を作つたもので、美しい景色が到るところに見られる。殊に神龍湖は帝釋川をせき止めてつくつた細長い湖で、水ゆたかに底深く、兩岸には屏風びやうぶを立てたやうな岩が立

ちならんで、おだやかな湖の面にはつきりと影をうつしてゐる。こゝに舟を浮べて靜に景色を眺め又魚釣をする氣もちはおくべつである。この湖から川上一里餘の間には雄橋・雌橋・唐門・白雲洞などの見るべきものが多い。

これ等を巡るには深い谷底の岩角をふみ、あぶない丸木橋を渡り、或は木の根にすがり、急な崖を梯子傳ひに行く所もあつて面白味が盡きない。

今は探勝道路も出來、庄原や福山から自動車の定期の便が多く、遊覽客も年々にふえて行く。

帝釋峽と共に名峽と

三段峽は大正十四年名勝地に指定せられた。



三段 瀧

されてゐる三段峽は太田川の川上で山縣郡にある。岩石のわれ目にそうて、川がくひこんで流れたため、瀧急流淵などがたくさんあつて眺めのうつり變りが面白い。

中でも名高いのは猿飛である。青くすみきつた淵に小舟を浮べて行くと、間もなくきりたつた岩が見える。高さ三十米位もあらう。ぬつとそびえてまるで鬼が大きな鋸でひき割つたかと思はれる。そこへ舟を進めると、すうつと寒い風がふいてくる。きれいにすんだ水が底知れないで恐ろしい程である。きりたつた岩に紅葉などがのぞきかゝつて其のこずゑ越しに一すぢの青空が見える。ほんたうに猿が一とびにこえられさうだ。

猿飛を通りぬけると、ごうくと物すごい音が聞える。それは二段になつて落ちる二段瀧で、白い袴のやうである。そのほかに三段に落ちる三段瀧や、龍門・三つ瀧などがあつて、次から次へと人の

心を樂しませる。

第九 鮎

鮎は東洋特産の魚で、我が國各地の川にすみ、支那や滿洲などにもある。廣島縣では主として太田川、可愛川に多く、沼田川が之に次いである。

十分成長した鮎は三十糎以上もあるが、ふつうは二十糎位である。小さい時は海に育ち、春三四月頃、六七糎になれば川へさかのぼつて来る。初めは水中の小さい動物を食べ、十四五糎にもなれば主に水底の石についてゐる水垢を食べる。八月頃には十分成長し、體もよく肥え味もよくなる。秋の中頃から終にかけて、卵を産むために河を下つて瀬に集り小石に卵を産みつける。親魚は間も

鮎は俗に「あい」といふ。

水垢は硅藻のことである。

産卵後の鮎をさび鮎といひ、越年した鮎をとり鮎といふ。

なくほとんど死んでしまふ。昔から鮎を年魚と書くのはこのためである。

卵は二十日餘りもすればかへる。かへつた鮎は水に流されて海に入り、冬の間は水の温い海中でみじんこ等を食べ、成長する。廣島縣の鮎は近年非常に減つて来たばかりでなく、だん／＼小さくなるかたむきがあるので、これについて水産試験場で色々研究されてゐる。

鮎をとるのは六月一日から十月末日まででその方法は一様でなく、網や釣や鵜飼等が行はれてゐる。三次の鵜飼は名高い。鮎は香魚とも書く。これは肉によい香のあるためである。

第十 木原松桂

今から凡そ百五十年前に安藝國賀茂郡杵原村に木原松桂といふ人があつた。家は百姓で多くの兄弟がある上に、父は病氣勝であつたから、暮しむきは甚だ苦しかつた。

松桂が四歳の時、母は我が家を立出たきり再び歸らなかつた。やさしい母に可愛がられてゐる近所の子供達を見るにつけても、松桂の母をしたふ心は強くなるばかりで、やがて十四五歳になつてからは、どうしても母をたづね出さうと決心するに至つた。けれども、家が貧しくて旅に出ることが出来ないのていろ／＼と考へた末、僧になれば諸國を行脚することが出来、したがつて母に會ふことも出来るかも知れないと思つて、父に頼んだけれども許してはくれなかつた。

それでも松桂は力を落さず、今度は醫者となつて母を尋ねようと決心し、遂に父の同意を得て、醫術を學ぶことにした。喜び勇んだ松桂は、一日も早く目的を達しようとかくごして一心に勉強した。十九歳の春我が家に歸り父に向つて、

「私が醫者になりたいと思つたのは、たゞ母上をたづね求めて両親のある身となりたいが爲です。どうぞしばらくの間おいとまを下さい。」

と頼んだ。父はその熱心な顔をつく／＼と見てゐたが、やがて兄と共に行くことを許し、母は四國の旅に出たことを語つて聞かせた。

なほ松桂は母の様子をくわしく聞いて、尾道まで行き、海を越えて讃岐へ渡つた。そして、琴平丸龜と方々をめぐつて、母をたづねたけれども一切分らなかつた。仕方がないので一先づ歸國するこ

とにして、やがて我が家にたどりついた。それから九年、また師のもとに居て醫業に精出して居た。人手に渡つてゐた母の鏡を買ひもどし、形見としてはだ身はなさず懐ふくろにしてゐた松桂は、いつもこれを取り出しては、早く母に會ひたいと念じてゐた。またもらつたお金は少しも使はず他日旅用にするためにあづけて置いた。

かくして二十七歳の時、今度こそはと決心して、いよいよ先生や父に別れを告げて、たゞ一人母を尋ねて旅立つことになつた。

松桂は再び讃岐に渡り、更に尾道に引返し、今津・松永・鞆・福山を経て備中びつちゆうに入り、心あたりをさがして三度四國に渡つた。讃岐・阿波・伊豫いよと残るくまなくたづね求めたけれども、どうしても母に會へない。昨日はとある家の軒下に、今日は月影寒き草の葉かげに旅寝の枕まくらを重ねつゝ、或は乞食こじきとのゝしられ、或は盗人たうどとあやまられな

がら、たゞ折々ゆめにかよふ母の姿を胸に抱いて自らなぐさめ、自らはげまして、ひたすら母を求めてさまよふこと數年に及んだ。けれども更に一度も母らしい人にさへも出會ふことが出来なかつた。

その後ある時、西遊記の中に

吹上ふきあげの濱は眞砂まごこに埋れて

老木おいきながらも小松原かな

といふ歌があつたことをふと思ひ出した。この長い海岸の小松原こそ、夢で母に會つた所と思ひ、吹上の濱をたづねて、はるく薩摩さつまに下らうと思ひ立つた。

とかくする中、その年も終り頃となつた或る夜のことである、母のことなど思ひつゞけて眠られなかつたが、心つかれてうたゝねして居た松桂は、夢にとある濱へに出た。うつくしい景色に見とれ

てゐると墨染の尼が現はれ、松桂に向つて涙を流しながら

「私がおまへの母である。永らく尋ねてくれてうれしいぞ」

とその手を取り、背をなで、よろこぶ姿に、松桂はよろこびにたへかねて、しばらくは言葉も出なかつた。やがて

「今母上のゐます所は。」

と、問ふと

「よなご。」

また

「何といふ人の所にゐますか。」

と、問ふと

「よねだやもきち。」

と答へたまゝ消えうせてしまつた。この不思議な夢は、きつと神佛が母を慕ふ我を憐んで引き合はさうとなさつたものと信じ、急

に九州行をかへて、伯耆國米子に向ふことにした。

夢をたよりに米子の町に米田屋茂吉といふ人をたづねあてたけれども、母のことは分らなかつた。しかし外にも米田屋といふ屋號を名乗る人が多かつたので、これ等の人々について根氣よくたづねたがどうしても分らない。せつかく喜び勇んで來たものをたづね得ずに引返すことは残念でならなかつた。つひに思ひあきらめて明日は此所も立たうとした夕方、あけてくれに慕ひ求めゐた母は、もう三十年も前、弓が濱の西、渡り村でなくなり墓は大祥寺にあるときいて、氣もくるはんばかりになげき悲しんだ。

直ちに松桂は大祥寺にまゐり、母の墓前にさめざめと涙を流し悲しい親子の對面をした後、遺骨をいだいて故郷に歸つた。

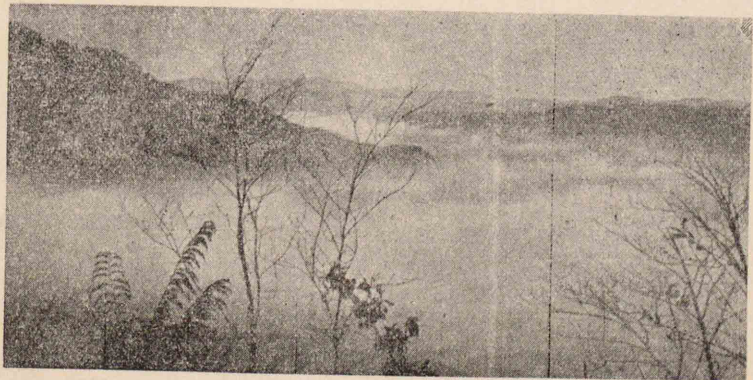
松桂が母を尋ねること四十年、その深い孝心は世にまれなたふとい鑑である。

賀茂郡西高屋小學校校庭にある頌徳碑は、松桂の孝行をいつまでも物語るものである。

第十一霧の海

まだ夜の明けきらぬうちに山の頂に登つて、新しい空気を吸ひながら、眼下の景色をながめる程、氣持のよいものはあるまい。

九月十月の晴天つゞきの頃、三次町の郊外にある山上の岩屋寺に前夜から泊り込んで、明方から眺め入る霧の海は、昔から三巴といはれる三次盆地の名物とな



霧の海

つてゐる。

霧の浅い朝の景色も刷毛でぬつたやうで面白いが、深いをりはすべてが白い幕に包まれて、何も見えない大海原になつてしまふ。じつとしてゐる自分がいつの間にか天人にでもなつたやうな氣がする。

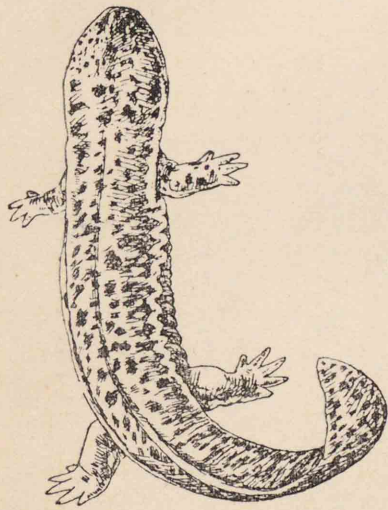
やがて太陽が靜かに東天にかゞやき霧のはれるにつれて、あちらこちらの山々が海上の島々のやうにあらはれ、三巴に流れる馬洗川・西城川・可愛川や小山・森・煙突・家・汽車等、眼下のながめが次第に開け、今まで眠つてゐた町や村が繪のやうに浮いて來る。

第十二はんざき

去年の夏休に、僕はお母さんと二人で、田舎の叔父さんのうちへ行

はんざきは我が縣の北部地方に多くすむ。

つた。叔父さんのうちは、自動車で四時間もかゝる山奥で夏の盛りでもずるぶん涼しい静かな所である。その時の事である。一日その兄さんにつれられて、けはしい谷川をのぼつて行つた。大きな岩のかげに、面白いかつかうのものを見つけたので、大聲で兄さんと呼んだ。兄さんとはぶやうに下りて来て、「なあーんだ、はんざきか。」と笑つてゐた。あまり珍らしいので、静かにずうつとのぞいて見た。頭が太くて、もりのやうで、黒い色をした體中にいぼの様なものがたくさんある。足のさきには短い指がある。石のかげになつてよく見



きざんは

いので、静かにずうつとのぞいて見た。頭が太くて、もりのやうで、黒い色をした體中にいぼの様なものがたくさんある。足のさきには短い指がある。石のかげになつてよく見

えないが尾のさきの方はひらたくなつてゐる。よく見ようと思つてもつとのぞいたら、岩の下にはいつて見えなくなつてしまつた。かへり道で、兄さんからはんざきのお話を聞いた。

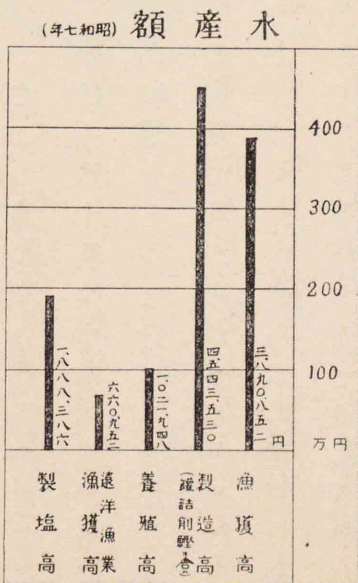
はんざきはさんせううをともいつて、この邊の深い谷川の水の下くすんだ所にゐるもので、大きいのは七八十糶位もある。おもに夜出て細い鋭い歯すゐで、小さい魚やかに等をとつて食べるのださうだ。かへるやゐもりと同じ仲間の動物で、卵からかへると、やはりおたまじやくしの形をしてゐると言はれた。ずるぶん元氣な動物で、體を半分にさいてもまだ生きてゐるといふのではんざきといふ名をつけたのださうである。

肉はなか／＼おいしくて以前は麥わらにつゝんで、焼いて食べたものだが、近頃は、この珍らしい動物がだん／＼へるので、國のきまりで、とることをとめ、天然記念物の一としてあるとの話である。

第十三 廣島縣の水産業

廣島縣は備後灘・安藝灘・廣島灣に面し、海岸は出入に富み、海には大小無数の島々があり、氣候が溫和で魚貝や藻類が多く、水産業には最も適してゐる。内海に流れる太田川・蘆田川・沼田川等は、海水のこさを減ずるので餌になる小さい生物がよく繁殖し、魚貝類の生育に都合がよく天然の養殖場である。海岸は一般に遠浅で干潟が多いから、牡蠣や海苔などの養殖もなか／＼盛である。又陸上には多くの川が縦横に流れ、池や沼も方方にあつて川魚もたくさんとれる。

廣島縣水産高



漁獲される魚類はその數頗る多く、百五六十種を下らない。主なものは鯛と鰯で、鯛は東の方備後灘に多く、鰯は西の方廣島灣に多い。その他ぼらかれひえびなどもたくさんとれる。廣島灣の牡蠣・蛤・あまのり等の養殖は昔から世に聞え、年々盛になつてゐる。川魚では鮎が第一で、太田川・可愛川に最も多く、數年前から養殖も盛に行はれるやうになつた。我が縣の水産物の總産額は年二千萬圓をはるかに超えてゐるほどである。これ等水産物は福山・尾道・廣島・草津・その他縣下七十餘の魚市場で取引され、縣内のもとめをみたすだけでなく、大阪・名古屋・東京・遠くは支那・滿洲までも送り出されてゐる。

第十四 ゴム工場

広島市のゴム工業は全国的に有名である。

日曜日にあるゴム工場を見に行つた。

案内の人につれられて、古いゴム靴やぼろぼろになつたタイヤ等のたくさん積んである大きな倉庫の前に出た。この古ゴムも加工せられて新しい製品が出来ると聞いて驚いた。

先づ案内された所は原料庫である。大きな煉瓦造りの倉庫の中にはゴムの木から取つたゴム液を加工した生ゴムがうず高く積み上げられてゐる。

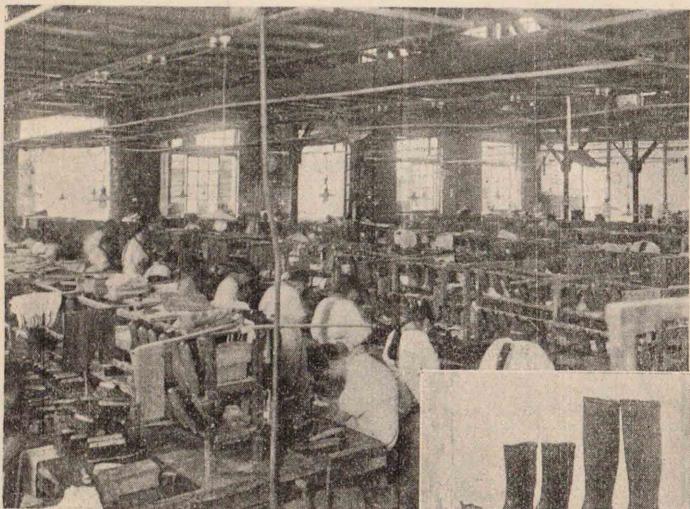
原料庫を出ると次の大きな棟が工場である。学校の講堂よりも広い位である。機械のきしる音がまことにさうざうしい。

工場のすみに調合室がある。其所には、色々の薬品が大きな箱に入れてならべてあり、職工がそれ等の薬品を秤ではかつてせつせ

と調合してゐる。調

合されたものは次から次へと工場へ運ばれて行く。この薬品を、原料の生ゴムに加へて、質を丈夫にし弾力をつけるのだといふことだ。

広い場内には色々大きな機械が動いてゐる。入口に近い所に大きな二つのロールが回轉してゐる機械



部一の場工ムゴ



品製

がある。ロールの間には生ゴムがはさまれて、びち／＼と音を立てゝゐる。職工がそれに調合した薬品をふりかけて配合する。それが終ると次のロールに移されて、きれいな板ゴムになつて送り出される。出て来た板ゴムは、手ぎはよく色々な形に切り取られて行く。

その向ふには、エプロン姿の女工が、切り取つたゴム板を型かたにあて、はり合はせて長靴をつくつてゐる。見る間に五六足も出来上つた。

出来上つた長靴は、トロツコに積まれて蒸気釜じょうきかまに入れられる。蒸気釜へは百四十度位の蒸気が送られ、今まで生ゴムの状態じやうたいであつたものが、弾力のある普通のゴム靴になるのである。

こゝでは、他にゴム草履やスポンジの枕、マット等も盛に造られるといふことである。

これ等のゴム製品は内地だけでなく、世界の各地、特にアメリカ合衆國・滿洲・支那・南洋方面へ多く輸出されるのだと聞いてうれしいやうな氣持がした。

第十五 石井末忠

今から約六百年昔、後醍醐天皇ごたごの御代、足利尊氏あしかががそむいた。楠正成・新田義貞等の忠臣も少くなかつたが、天下の武士は大方尊氏について官軍は甚だ振はなかつた。このやうに少い忠義の武士の一人に安藝郡府中村の人石井七郎末忠がゐた。

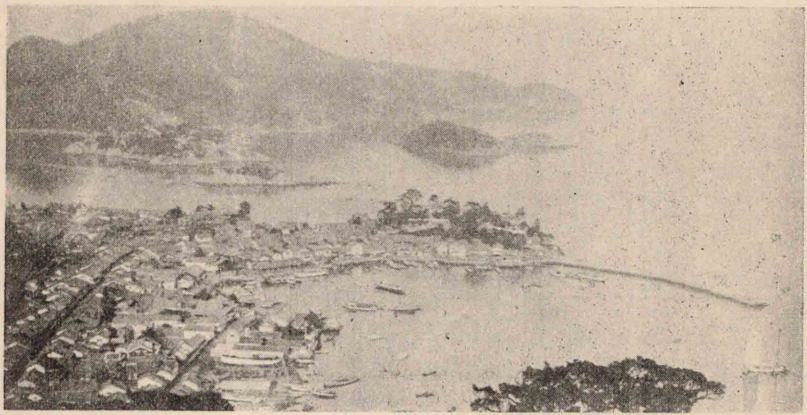
後醍醐天皇は、北條高時のために遷うつされ給ふた隠岐島かくぎをお逃れになつて、伯耆の船上山によつて忠臣を天下にお集めになつた。その時石井七郎末忠は命を投出してはせ参り、名和長年等と共に天

石井氏、本姓は三宅氏、代々田所職を奉じてゐたので又、田所氏ともいひ又、多家神社、嚴島神社の祠官ともなつた。後府中村石井に城を築いたので石井氏ともいふ。今府中村にある田所氏はこの子孫である。

皇の御爲に盡し奉つた。かくして天皇は京都におかへりになつた。
 後足利尊氏朝敵となつて、延元元年五月二十五日弟直義と共に九州・四國・中國の兵十餘萬をひきゐて攝津の兵庫におし寄せ、いきに京都にせまらうとした。末忠は楠正成の下にあつて官軍の將士と共に勇ましく戦ふこと六時間餘、つひに刀折れ矢つきて身には無数の重傷を負ひ、楠氏一族さいごの地と程遠からぬ湊川のほとり、北の方京都の天ををがみ、名を惜しむ武士として花々しいさいごをとげた。大正十五年五月從四位をおくられた。

第十六 鞆 の 浦

鞆の浦は嚴島とならんで、世界の公園瀬戸内海の中でも特に景色



鞆 の 浦

のよい所である。
 北西を包む山々の中に最も眺のよい醫王寺山があり、その麓に鶴の形をした鞆の町、町の西方には名高い阿伏兔観音がある。
 内海に美しく浮んでゐる大小の島、老松のしげる城山公園、要害明神山などの小さい丘、長く突き出た防波堤によつてかこまれてゐる港、之を守つてゐる玉津島、静かな港にならぶ大小無数の漁船、又電燈の光や小さな船の燈火にうつくしい夜の港、ここに遊ぶものは、思はず備後鞆

仙酔島及附近の島は、大正十四年名勝地として指定せられ、更に昭和七年瀬戸内海国立公園に編入された。

辨天島は又百貫島ともいつて辨財天を祀つてある。

小松寺には平重盛手植といはれる松の大木がある。

の津、繪のやうな港」と歌ひたくなつてくる。

頼山陽が「仙人の酔へるが如し」とほめた仙酔島は、かしくも今上陛下が攝政宮におはす時、行啓あらせられたところ、町東に浮島のやうにぼつかりと浮いて見える。そのすぐ西に見えるのは、古い傳説のある辨天島で、岩ばかりの小さな島に、年とつた松が枝ぶりよく生えてゐる。

夏は涼しく避暑客でにぎはひ、冬はあたくかく保養するものが多い。春の鯛網や、保命酒は人々によく知られてゐる。

自然にめぐまれた鞆の浦は歴史にもめぐまれてゐる。神功皇后のお立ち寄りになつたと傳へられる沼名前神社を始め、安國寺跡、小松寺など古い歴史を物語つてゐる。

昔韓の使が對潮樓に上つて、近くにある仙酔・辨天・皇后の島々を眺め、額に筆太く「日東第一形勝」と書いたのももつともなことである。

第十七 備後織物

福山地方に盛につくられてゐる備後絣は、今から八九十年前に蘆品郡有磨村の人、富田久三郎が始めて工夫したもので、文久の頃には文久絣と言はれてゐたが、後に備後絣と言はれるやうになつたのである。

備後縞は神邊地方で盛に作られたので、神邊縞とか福山縞とかいはれ、多くは自分の家で作つたものであつた。

備後織物は、價が安く地質も強く、實際に役に立つので人々に好かれてゐる。又近頃廣巾織物が盛になつてきて貿易品の一となつた。これ等は年に百二十萬反、凡そ三百餘萬圓も出来るのであるが、近頃福山工業試験場と地方の人々の熱心な努力によつて、ますます盛になつてゐる。

織物の原料は大阪・神戸・倉敷・福山などから買ひ集め、其の製品は東北・山陰・北海道・九州地方に送り、又東京・大阪・京都では特に喜ばれ盛んに注文されてゐる。

工場は神邊・新市・水呑などに多く、大てい山の麓や、河の岸などの交通に便利な處にあつて、硝子窓の多い片屋根の建物で一目見てもすぐわかる。その側にはきつと糸を洗ふ池か堀がある。

この地方は晴天の日が多く交通も便利で、その上人々がよく働くので恐ろしい勢で發達してゐる。

第十八蜜柑山

いよ／＼蜜柑の取り時になりました。どこの畠にも人が大勢働いてゐます。こい緑の葉の間から、黄色の實が光つて見え、その間



蜜柑山

を白い手拭が、あちらこちらと動いてゐます。話す聲、歌ふ聲、それにつみとるはさみの音がまぢつて、とてもにぎやかぞのどかです。かごは見るまに、蜜柑で一ぱいになります。向ふの山の細道を、となりのをぢさんが大きな籠をかついで下りて來てゐます。多分選果場へ行くのでせう。選果場には大きな選果機があります。たくさんの蜜柑

が選果機の上をころ／＼ころがつて、大中小の三通りにわけられます。わけられた蜜柑を、それぞれ箱につめて、組合できまつたマークをはりつけます。

今こちらの海岸で、はしけにたくさん箱をつんでゐるのは、皆この村でできた蜜柑がはいつてゐるのです。

船が来るとあれを積み込み、間もなく方々へ賣出すのです。遠く大阪・神戸更に満洲、又近頃は太平洋をのりこえてアメリカまでも行くのださうです。

はしけの右側に大きな煙突の先が見えます。あれは蜜柑のかんづめ工場です。こゝでも大ぜいの人達が働いてゐます。蜜柑は夏以外一年中たべられますが、皮をむいでかんづめにしておくと、何時何所でもたべられます。

我が県の蜜柑の年産額は約百三十萬圓、ネーブルは約三十五萬圓である。

私達は、産額に於ても品質に於ても、氣候と土質に適した我が県の

蜜柑が全國で第一になるやうに望んでゐます。

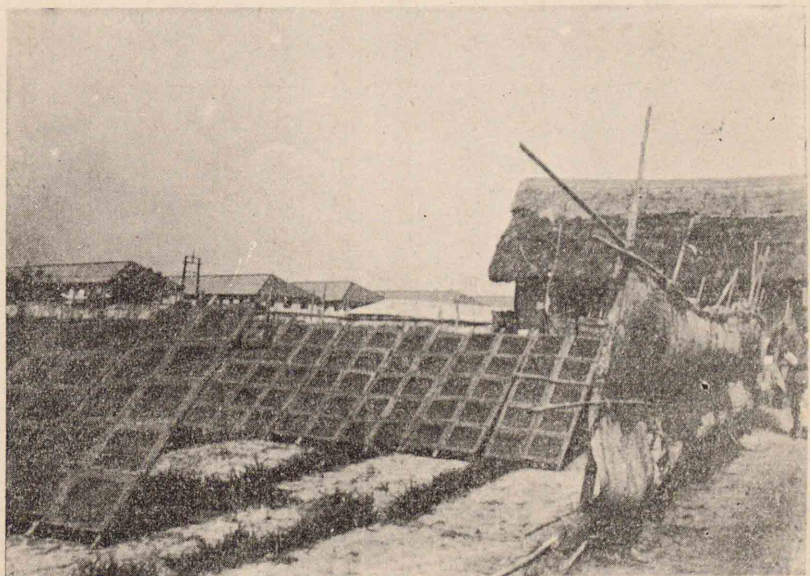
第十九 廣島海苔

お天氣のよい冬の日に草津や江波・仁保の本浦・大河あたりを通ると、到る所で海苔漉が行はれてゐるのが見られる。

深いざるの生海苔を木の臺にあけて大きな庖丁を兩手にと、んとん／＼と刻む人、刻んだ海苔を大きな桶に入れて海苔水をつくる人、竹簀にわくをのせ海苔水をかけて漉きあげる人、漉いた海苔を長く並んだ乾臺にかけ並べる人、誰もかれも皆いそがしさうである。あたりにたゞよふ海苔の香、びち／＼と乾く音、海苔漉場は生々としてにぎはしい。

生海苔は養殖場の筈から摘んで來たものである。養殖場に行つ

て見ると干潟一面に竹筵がぎやうぎよく立ちならんで、其の間に腰までもある深いゴム靴をはいた人達が、大きなかごにのびのよい海苔を手ぎはよく摘み取つてゐる。面白さうな話聲、楽しさうなはなうたが聞えて来る。海苔は正しい名前をあまのりおよび、川口近くの砂地で塩分の少い波の静かな所によく成長する。秋



海苔乾場

我が縣の年産額は約二十五萬圓、その中廣島市が二十三萬圓を占む。

の寒さが身にしむ頃になると、胞子ほうしが筵について芽を出しはじめ。うすい小さな芽生えはだん／＼長くのび、はばも次第にひろがつてくる。冬になるとますます／＼成長してはば十糎、長さ二三十糎にもなり多くの皺しわがよつてくる。海苔を摘み取るのはこの時期で、たいいてい一月始めから三月末までの身を切るやうに寒い時である。春になると胞子が出来、葉は枯れて流れてしまふ。廣島灣での養殖は今から三百年も昔、本浦の長三郎といふ人によつて始められたと言はれてゐる。本浦の茶屋半三郎、淵崎の葭川忠四郎、江波の柳屋又七等は色々苦心に苦心を重ねて、漉海苔のものとを開いた恩人である。こんなにしてつくり出されるやうになつた廣島海苔は、今では東京の淺草海苔と共に天下に名をたゝへられてゐる。

第二十 黄金の太刀

軛見物に行つた時、仙醉島へ渡る舟の中で、

「船頭さん、あれが名高い辨天島ですか。」

と尋ねたら色の黒い船頭さんは、太いこゑで、

「へえ、さうです。」

と、いつて面白い話をしてくれた。

「昔、都の身分の高い人がこの港へ来た時、舟に乗つて方々を見物してゐたが、美しい景色に見とれて、黄金の太刀を海の中におとしました。」

その人は青くなつて、船頭しゆう拾つておくれ。ほうびはのぞみ次第ぢや。」とたのみました。

ところが、こゝは大そう深く、その上人を食ふ鱻ふかがあるのだから、

一人とびこむ者はゐませんでした。

そこで都の人は、土地の人々を弱

虫だとか、こしぬけだとか、さんく

悪く言ひました。

その時、一人の若者がざんぶと海に

とびこみました。五六分たつて、若

者は太刀をくわへて浮き上つてき

ました。舟ばたから、太刀を渡しな

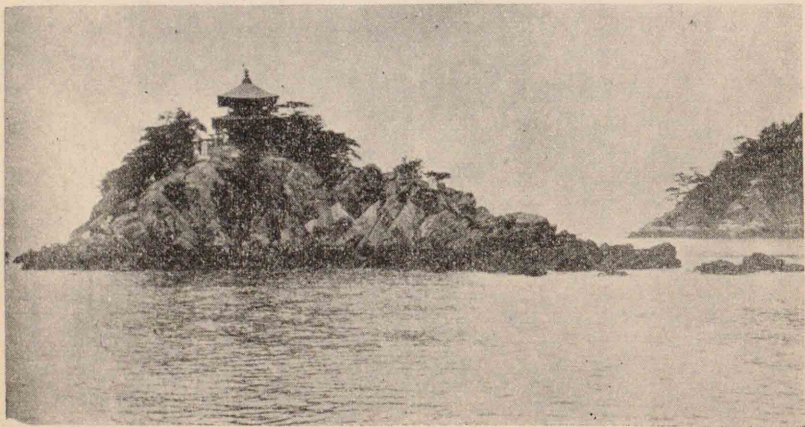
がら旅の方、軛のものは男でござる

ぞ。」といつて、がくりといきがきま

した。若者から流れ出る血が、一面

に海を赤くそめてゐました。

そこで都の人は黄金百貫を出して、



島 天 辨

その若者をねんどろにとむらつたといふことです。」
と、いひをはつて辨天島の方を見つめた船頭さんの顔は今でも忘れられない。

第二十一針

廣島縣の特産物中、世界に有名なものは針を以て第一とする。我が國はイギリス・ドイツと共に世界の三大製針國であるが、我が國の製産額の十分の九は實に廣島で出来るのである。針工場には所狭いまでに色々な機械がそろつつけられ、勢よく廻つてゐる中で職工が働いてゐる。

第一は切斷機で軟鐵の針金をこれにかけて長さ七八厘に切取る。一臺で一分間に數萬本も切斷する。その勢のすさまじいことに

驚かされる。切斷した針金は少し弓なりに曲つて居るので、五千本づゝの束にして、壓搾機にかけ、炭火で熱して眞直にするのである。それから大きな回轉鑪のついた機械にかけて兩端を尖らせ、別の機械でその針金のまん中に二つの孔をあけ、その機械から出す時には、二つの孔の中程を切斷して二本の針にし、次々と送り出す。しかしその針はまだ軟鐵であるから、木炭の粉と共に熱して鋼にし、研磨機で二十日間位も磨くのである。すると我々の使ふ針が出来上る。

出来上つた針は包装場に運び、二十五本づゝ、錫箔に包み、その上を會社のマークのついた包装紙で包む。その十包をいくゝりにし、二十くゝりをハトロン紙で更に大きなつゝみにし、五十づゝまとめて箱につめる。つまり一箱に二萬五千本の針をつめて各地の針問屋に送り出すことになる。

この廣島針はもと長崎の人木屋治右衛門が己妻に来て、淺野家の藩士に製法を傳へたのに始まるが、それ以來二百餘年たえず工夫研究をつんで、今日では年額八十萬圓に及び日本全國は勿論、支那、滿洲、南米、北米等世界各地へまで賣り出されるやうになつた。

第二十二 すなめりくぢら

すなめりくぢらは一名ぜごんどともいふ。

三月のある日、父と船で忠海沖の阿波島附近を通つた時の事である。黒い大きなものが七八匹、頭を出しては沈み、沈んでは又浮び、五六回もつゞけたと思ふと、二百米も遠方で浮んでゐる。一群が向ふへいつたと思ふと、また一群がやつて來た。くぢらかなと思つたが、父をひつぱつて上甲板へ出た。

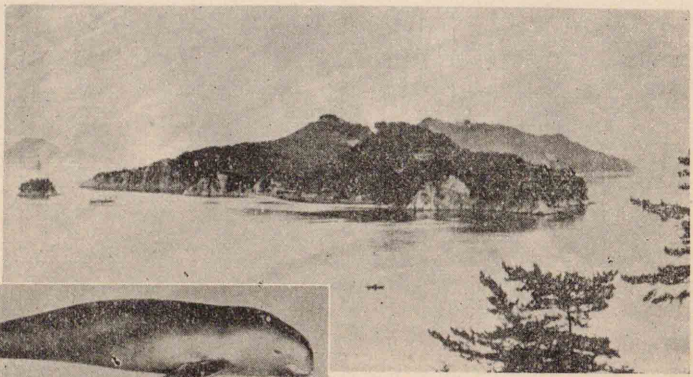
「お父さん、あれ御覽、あれはくぢらですか。」

と尋ねると、

「くぢらにしては小さいね、あれはくぢらに似た、すなめりくぢらと言つて、一米半位の大きさのものだ、中々よく泳ぐだらう。ぜごんどともいふのだ」とおつしやつた。

僕はこんなものを見るのは初めてなので、お父さんに聞いたら更に次のやうに話して下さつた。

「一たいこの動物は、アフリカから印度にゐるのだが一月頃になると、この



阿波島とすなめりくぢら

瀬戸内海へ子を産みに来るらしい。瀬戸内海でもこの邊は大へん深く、しかも安全なので子を育てるには一番よい。そればかりでなく、大好物のいかなどがあるのので尙便利である。いかなどは海の表面にすむ魚類で、この邊のやうに下潮、上潮の流の早い渦巻の海にゐるのだから、これを追ひ廻して食べてゐるのである。所が面白いことには、この動物がいかなどを追ひ廻すといかなどは海の底へ逃げる。すると海の底にすむ鯛やすゞきが、大好物が来たとはばかりその下に集る。この時に漁夫達はこゝぞとばかり集つた鯛やすゞきを釣るのだ。年中で一番獲物の少いはづの時節にも、すなめりくぢらのおかげで時には漁獲高數千圓にも上ることがある。だから漁夫達がすなめりくぢらを可愛がることは大へんなものである。しかし段々數は少くなるらしい。それで昭和五年天然記念物として指定され、今では一切この動物に危害を

加へることは出来ないことになつた。」

第二十三 荒 分 銅

山縣郡川迫村に藏迫といふ所があつて、そのかた隅に明知といふ小さい部落がある。そこに青々と水をたゝへた一つの用水池があるが、この池の出來た由來が面白い。

今から百年程前の或る秋の頃、時の代官郡内巡視のことがあつた。或日代官は、當時の藏迫村から老松茂る井ヶ尻峠を越えて、川戸村に向つたのであつた。代官の駕が井ヶ尻峠にさしかゝつた時、向かふから馬に米二俵を負はせて來る馬子がある。家來は聲をばげまして、

「下に居れ、下に居れ、」

と命じた。

突然代官の巡視にあひ、おそれいつた馬子はあちらこちら見廻はしたが、よけるやうな道はない。忽ち米二俵を負はせたまゝ馬を兩腕にかゝへて難なく小溝をまたげ、代官の駕を通した。

代官はこれを見て、その力の程に感心し駕を止め、馬子を駕近く呼びよせて、之に褒美をとらせようとした。

代官は望むところの褒美をたづねたが、馬子は、

「何もおほめをいたゞくわけはありません。だが有難いお言葉をいたゞきましたから、只一つ望みを申し上げます。この地方は用水に乏しく、久しく日でりに苦んで居ります。出来ますならば、用水池をつくることをお許し下さい。」

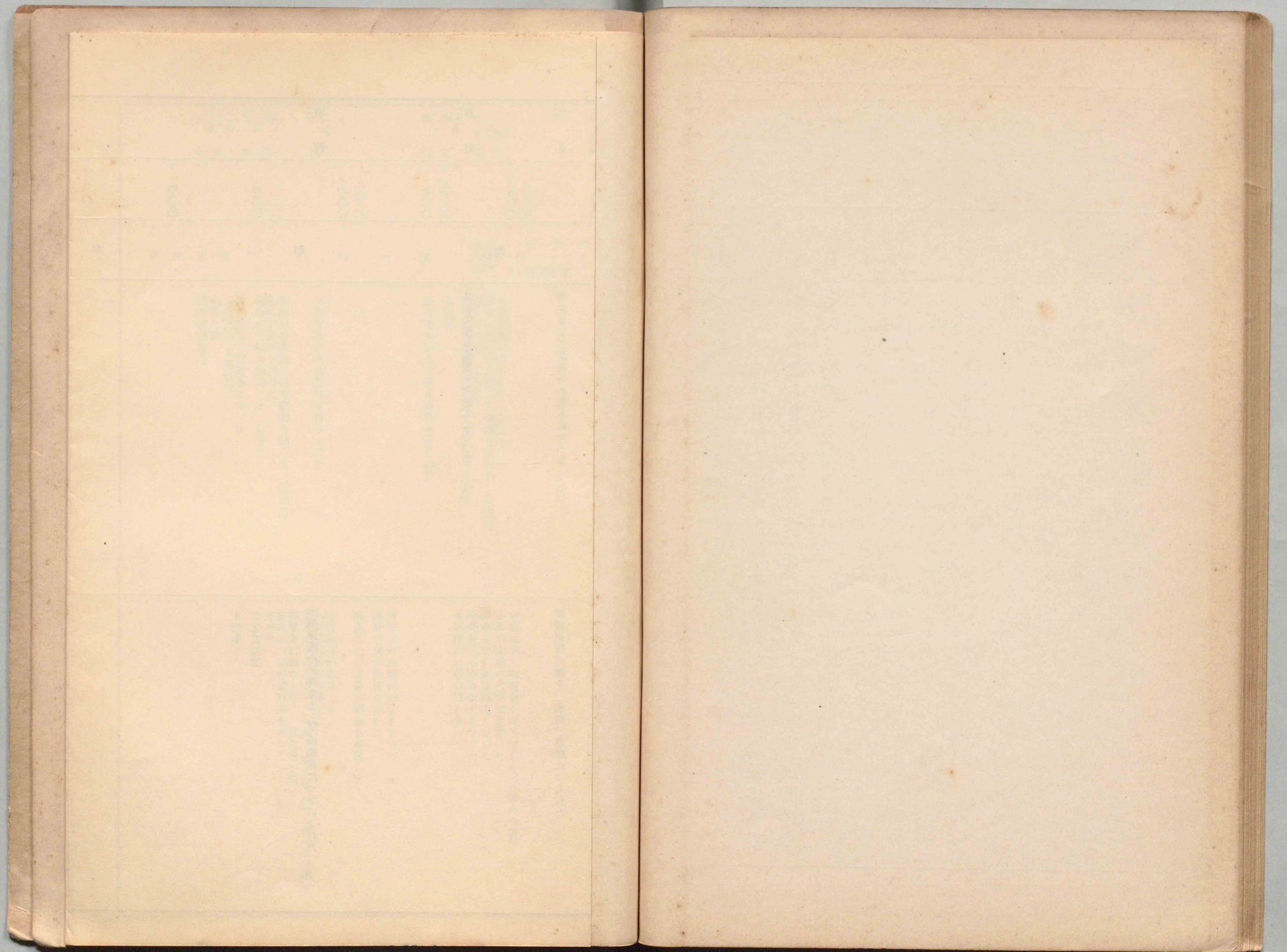
と願ひ出た。代官は直ちにそれを許した。

かうして出来たのが今見る明知の大用水池である。語り傳へて

今なほその徳をほめないものはない。

この馬子こそは藏迫村に生れた力士荒分銅である。力及ぶものなく、用水池を造る時彼の運んだと傳へられてゐる大きな石は、今も存して人々を驚かせてゐる。

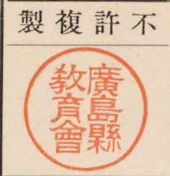
郷土讀本 上卷 終



(廣島縣郷土史年表)

天皇	紀元	時代	國史上の人物・事件	郷土の人物・事件	
天照大神	一	神代	神武天皇御即位、紀元元年	神武天皇が埃宮・備後高島によられた	
神武	一〇〇	大和			
	二〇〇				
	三〇〇				
	四〇〇				
	五〇〇				
崇神	六〇〇		和		吉備津彦命を將軍として山陽道につかはされた
	七〇〇				
景行	八〇〇		時	日本武尊が熊襲をお討ちになった	
仲哀	九〇〇			神功皇后が新羅をお討ちになった (八六〇)	神功皇后が鞆や、糸崎、草津によられた
欽元	一〇〇〇		代		
推古	一〇〇〇		はじめて佛教が傳はつた	佐伯鞍職が嚴島神社を建た	
明	一二〇〇		聖德太子が十七條の憲法をお定めになり、又、支那に使		

昭和十年七月一日印刷
昭和十年七月五日發行



郷土讀本(上中下各)

定價 金拾八錢

著者 廣島縣教育會

發行者 廣島市堀川町七十六番地
丸岡才吉

印刷者 廣島市堀川町六十三番地
丸岡政造

發行所

廣島市堀川町
會社名 廣

文館

電話一七七一七二四番
振替大阪二二五三七番

最新兒童學習參考書

安田百助著	受驗 補習	二行式實力算術	定價七拾錢
田邊日出男著	受驗 合格	統計讀方の總仕上げ	定價六拾錢
檜高憲三著	必ず合格 出来る	學習算術	定價七拾五錢
木田義登著		分類式力の算術	定價參拾錢
竹澤丹一編		小學書方學習帖 <small>一尋一高二</small>	定價各拾錢
廣島縣教育會著		郷土讀本 <small>(上,中,下)</small>	定價各拾八錢
廣島縣教育會著		廣島縣地理	定價拾七錢
廣島縣教育會著	新定	珠算教科書	定價拾五錢

發行所

廣島市堀川町
振替大阪二二五三七番

廣文館

廣島縣全圖



廣島縣全圖



國鐵未通電氣
私鐵
縣界
1:600,000
0 5 10 15 公里



広島大学図書

2000302823

